

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：31309

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：23730663

研究課題名(和文)被害観念と社交不安との弁別要因の検討

研究課題名(英文)Study of discrimination factor of paranoia and social anxiety

研究代表者

森本 幸子(Morimoto, Sachiko)

仙台白百合女子大学・人間学部・准教授

研究者番号：10398539

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文):被害観念と社交不安との弁別要因を検討するために以下の研究を行った。

まず、被害観念を測定するための尺度である、State Social Paranoia Scale(SSPS)の日本語版を作成し、信頼性と妥当性を検討した。その結果、作成した尺度は十分な信頼性と妥当性を有することが確認された。次に、自己や他者へのスキーマや認知バイアス、異常知覚体験と、被害観念や社交不安との関連を検討した。その結果、異常知覚体験以外の変数は、被害観念と社交不安の両方と関連を示したが、異常知覚体験は被害観念のみと関連を示した。よって、異常知覚体験が被害観念と社交不安との弁別要因である可能性が明らかとなった。

研究成果の概要(英文):The following studies were conducted to examine the discrimination factor between paranoia and social anxiety.

State Social Paranoia Scale (SSPS) is a measure of paranoia. One of purpose of the study is to develop a Japanese version of SSPS. We examined the reliability and validity. As a result, a Japanese version of SSPS has a good reliability and validity. Then we examined discrimination factor of paranoia and social anxiety. Core schema about self/others, cognitive biases, and abnormal sensory experience were examined the association between paranoia and social anxiety. As a result, all factors without abnormal sensory experiences, showed an association with both paranoia and social anxiety. Abnormal sensory experience showed an association with only paranoia. Therefore, abnormal perceptual experience could be a discrimination factor of the paranoia and social anxiety.

研究分野：臨床心理学

キーワード：被害観念 社交不安 異常知覚体験

1. 研究開始当初の背景

Strauss(1969)によって妄想のような精神病症状が普通の体験の連続線上にあることが指摘されて以来、健常者を対象に被害妄想と類似した観念(被害観念)の研究が行われるようになった。そして多くの先行研究において、健常者でも被害観念を持つことが報告されている。例えば、健常者の約 21.2%が「自分に敵対している人がいると感じたことがある」と回答しており、9.1%は「自分を傷つけようとしている人がいると感じたことがある」と回答したとの報告がなされている(Johns, Cannon, Singleton, Murray, Farrell, Brugha, Bebbington, Jenkins & Meltzer, 2004)。

被害観念は健常者にもよく見られる現象ではあるが、統合失調症を始めとした精神疾患への移行リスクが高い精神状態(At-Risk Mental State)を判断するための重要な臨床基準の一つとされている。

しかし、被害観念によく見られる内容(例えば、「他の人から悪く思われている、馬鹿にされている」)は、他者からの拒絶に関連しており、社交不安障害などでもよく観察される。治療や介入のためには、被害観念と社交不安とを区別して捉えることが必要であるが、両者を弁別する要因についてはあまり研究が進んでいない。

2. 研究の目的

本研究では、被害観念と社交不安の弁別要因について明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の3つの研究を行うこととした。

(1) State Social Paranoia Scale (SSPS)日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討

健常者の被害観念を測定するために先行研究でよく用いられているパラノイア尺度(Fenigstein & Venable, 1992)は、その項目に不備があることが指摘されている。そこで、本研究では Freeman, Pugh, Green, Valmaggia, Dunn & Garety (2007)が作成した State Social Paranoia Scale の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

(2) 被害観念と社交不安の弁別要因の検討 1

被害観念と社交不安とを弁別する要因を明らかにするために、先行研究で被害観念や社交不安との関連が指摘されていた異常知覚体験、自己や他者へのスキーマ、Cost/Probability バイアスと被害観念や社交不安との関連を検討することを目的とした。

(3) 被害観念と社交不安の弁別要因の検討 2

上記(2)においては、質問紙調査を用いて被害観念と社交不安との弁別要因について検討するが、(3)では、注意バイアスを

用いた実験において、社交不安と関連する注意バイアスが、被害観念や異常体験と関連するのかどうかについて検討することを目的とした。

3. 研究の方法

各研究の方法は以下のとおりである。

(1) State Social Paranoia Scale 日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討

調査対象者は大学生 105 名(男性 40 名、女性 65 名)であり、平均年齢は 20.36 歳(SD = 1.45)であった。

大学における講義を利用して以下の質問紙調査を実施した。

日本語版 SSPS の作成に当たっては、原著者から日本語版作成の許可を得て著者が項目を翻訳し、翻訳した項目を臨床経験のある心理学研究者 2 名が確認した。その後、ネイティブスピーカーによるバックトランスレーションを経た後、再度著者が原尺度との整合性を考慮して項目を作成した。

妥当性を検討するためにパラノイア尺度(Fenigstein & Venable, 1992)の日本語版(丹野・石垣・大勝・杉浦, 2000)と山内・須藤・丹野(2007)によって作成された Paranoia Checklist (Freeman, Garety, Bebbington, Smith, Rollinson, Fowler, Kuipers, Ray & Dunn, 2005)の日本語版(JPC)を用いた。頻度や確信度、苦痛度など多次元的に被害観念を測定できる尺度である。

(2) 被害観念と社交不安の弁別要因の検討 1

大学生 122 名(男性 59 名、女性 63 名)を対象に、質問紙調査を行った。平均年齢は 19.94 歳(SD = 1.90)であった。用いた質問紙は以下のとおりである。

社交不安を測定するために、日本語版 Social Phobia Scale (SPS) (金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野, 2004)を用いた。

被害観念を測定するために、日本語版パラノイア・チェックリスト(山内・須藤・丹野, 2007)を用いた。

異常知覚体験を測定するために、Launey-Slade Hallucination Scale (LSHS: Launay & Slade, 1981)の日本語版(丹野・坂本・石垣・桑木野・山本・杉浦・毛利, 1997)を用いた。

自己や他者へのスキーマを測定するために、日本語版 Brief Core Schema Scale (BCSS: 山内・須藤・丹野, 2009)を用いた。

社交不安障害の維持要因であるとされる Cost/Probability バイアスを測定するために Social Cost/Probability Scale (SCOP: 城月・野村, 2009)を用いた。

(3) 被害観念と社交不安の弁別要因の検討 2

女子大学生 10 名(平均年齢 20.2 歳, SD = .63)

を対象に実験を行った。以下に手続きを示す。注意バイアスの測定のために dot-probe 課題を用いた(Mogg & Bradley, 1999)。この課題では、不安に関連する脅威語(例えば、「不幸」、「殺人」、「災害」など)と中性語(例えば、「市販」、「料理」、「意見」など)をコンピュータディスプレイ上に対呈し(500ms)、その後脅威語または中性語のあった場所のどちらかにドットが呈示される。被験者は呈示されたドットの位置をできるだけ早くボタン押しによって回答するように求められる。本研究では、金井・嶋田・坂野(2003)を参考に、脅威語と中性語の組合せ 40 試行を 2 セッション、中性語と中性語の組合せ 40 試行を 2 セッション合計で 160 試行実施した。なお、各セッション間には 3 分間の休憩を入れた。

課題終了後、被害観念を測定するために(1)で作成した日本語版 Social State Paranoia Scale と、異常知覚体験を測定するために健常者用幻聴様体験尺度(AHES: 杉森・浅井・丹野, 2009)への回答を求めた。

4. 研究成果

(1) State Social Paranoia Scale 日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討

因子分析を行った結果、日本語版 SSPS は原版の SSPS と同じ 3 因子構造であることが明らかとなり、因子的妥当性が確認された。

次に、日本語版 SSPS、パラノイア尺度、日本語版パラノイア・チェックリスト間の相関分析を行った結果、日本語版 SSPS と、パラノイア尺度、日本語版パラノイア・チェックリストとの間において、有意な相関係数が得られた($r=.50^{**} \sim .55^{**}$)。よって、日本語版 SSPS の被害観念項目の妥当性が確認された。また、信頼性分析では、日本語版 SSPS の被害観念項目の α 係数($\alpha=.90$) は先行研究(Freeman, et al., 2007)と同程度に高く、十分な内的整合性が確認された。

以上の結果から、日本語版 SSPS は被害観念を測定するための尺度として十分な信頼性と妥当性を備えていることが明らかとなった。

(2) 被害観念と社交不安の弁別要因の検討 1

被害観念や社交不安との関連が指摘されている要因との相関係数を検討した。その結果を以下に示す(表 1)。

<被害観念と社交不安の相関>

SPS と JPC の頻度($r=.63^{**}$)、確信度($r=.23^*$)、苦痛度($r=.44^{**}$)のいずれとの間にも、有意な正の相関がみられた。

<被害観念、社交不安と異常知覚体験との相関>

SPS と LSHS との間には有意な相関は見ら

れなかったが、JPC の頻度と LSHS との間には有意な正の相関が見られた。

<被害観念、社交不安と自己および他者へのスキーマとの相関>

SPS と BCSS のネガティブな自己スキーマの有無、ネガティブな他者スキーマの有無との間には有意な正の相関係数が得られた。また、同じ結果が JPC の頻度や苦痛度との間にも得られた。

<被害観念、社交不安と否定的社会状況についてのコストバイアスとの相関>

SPS と SCOP との間には有意な正の相関係数が得られた。また、同じ結果が JPC の頻度と確信度との間にも得られた。

以上の結果より、被害観念と社交不安は共に、他者や自己のネガティブスキーマや否定的な社会的状況についてのコストを高く見積もる傾向と関連していることが明らかとなった。よって、被害観念を持つ人も社交不安を持つ人も共に他者や自己に対してネガティブな捉え方をしており、否定的な社会的状況についてのバイアスを示すと考えられる。しかし、異常知覚体験は被害観念との間にもみ相関が見られ、社交不安との間には有意な相関は見られなかった。よって、被害観念と社交不安とはとても類似した現象ではあるものの、両者は異常知覚体験によって弁別できる可能性が本研究より示唆された。

表 1 各変数間の相関係数

	SPS	JPC 頻度	JPC 確信度	JPC 苦痛度
LSHS	.18	.26**	.11	.14
BCSS				
ネガティブ自己スキーマ	.37**	.36**	.14	.26**
ネガティブ他者スキーマ	.35**	.42**	.30**	.35**
ポジティブ自己スキーマ	-.18	-.18	-.05	.10
ポジティブ他者スキーマ	-.12	-.19*	.01	.06
SCOP				
対人コミュニケーション頻度	.53**	.26**	.35**	.16
一般的社会状況頻度	.35**	.26**	.43**	.06

** $p < .01$, * $p < .05$

(3) 被害観念と社交不安の弁別要因の検討 2

まず、日本語版 SSPS および AHES の平均点によって被験者を被害観念の高低群、あるいは異常知覚体験高低群に群分けした。

次に被害観念高低群、あるいは異常知覚体験高低群間の注意バイアスに違いが見られるのかどうかを検討した。注意バイアスの測定には、先行研究(金井・嶋田・坂野, 2003)を参考に、注意バイアス得点を算出したものを用いた。注意バイアス得点は、脅威語の反応時間から中性語の反応時間の差を求めたもので、注意バイアス得点が正の値になる時は、脅威語に対する接近的な注意を表し、脅

威語と同じ位置にドットが呈示されたときに反応が速くなることを示す。また、注意バイアス得点が負の値になる時には脅威語からの回避を表し、脅威語と異なる位置にドットが呈示されたときに反応が速くなることを示す。

<被害観念高低群における注意バイアス得点の比較>

被害観念高低群において、注意バイアス得点に違いが見られるかどうか、*t* 検定を行った。その結果、両群間の差は有意傾向であった($t(8)=-2.2, p<.10$)。被害観念低群に比べて、被害観念高群の注意バイアス得点が高い傾向があることが分かった(図 1)。

<異常知覚体験高低群における注意バイアス得点の比較>

異常知覚体験高低群において、注意バイアス得点に違いが見られるかどうか *t* 検定を行ったが、両群間に注意な差は認められなかった。

以上より、本研究の結果、注意バイアスは被害観念との関連は示されたものの、異常知覚体験とは関連しないことが明らかとなった。

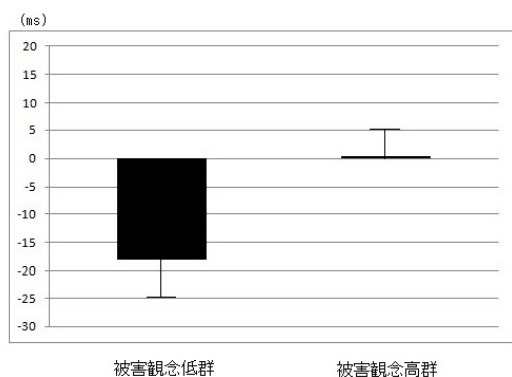


図 1 被害観念高低群における注意バイアス得点

<引用文献>

- Strauss JS 1969 Hallucinations and delusions as points on continua function. Archives of General Psychiatry **20**, 581-586.
- Johns LC, Cannon M, Singleton N, Murray RM, Farrell M, Brugha T, Bebbington P, Jenkins R, & Meltzer H 2004 The prevalence and correlates of self-reported psychotic symptoms in the British population. British Journal of Psychiatry **185**, 298-305.
- Fenigstein A, & Vanable PA 1992 Paranoia and self-consciousness. Journal of Personality and Social Psychology **62**, 129-138.
- Freeman D, Pugh K, Green C, Valmaggia L, Dunn G, & Garety P 2007 A measure of state

persecutory ideation for experimental studies. Journal of Nervous and Mental Disease **195**, 781-784.

丹野義彦・石垣琢磨・大勝裕子・杉浦義則 2000 Fenigstein らのパラノイア尺度の信頼性。このはな心理臨床ジャーナル **5**, 93-100.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 2007 日本語版 Paranoia Checklist の作成および信頼性・妥当性の検討。パーソナリティ研究 **16**, 114-116.

Freeman D, Garety P, Bebbington PE, Smith B, Rollinson R, Fowler D, Kuipers E, Ray K & Dunn G 2005 Psychological investigation of the structure of paranoia in a non-clinical population. British Journal of Psychiatry **186**, 427-435.

金井嘉宏・笹川智子・陳 峻雯・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 2004 Social Phobia Scale と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版の開発。心身医学 **44**, 842-851.

Launay G, & Slade P 1981 The measurement of hallucinatory predisposition in male and female prisoners. Personality and Individual difference **2**, 221-234.

丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨・桑木野正尚・山本真規子・杉浦義則・毛利伊吹 1997 精神病への素因のアセスメント技法(1). Cognitive and Behavioral Science Research Report #97-J4, 14-15.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 2009 日本語版 Brief Core Schema Scales の信頼性・妥当性。心理学研究 **79**, 498-505.

城月健太郎・野村 忍 2009 Social Cost/Probability Scale の開発。心身医学 **49**, 143-152.

Mogg K, & Bradley BP 1999 Some methodological issues in assessing attentional bias for threatening faces in anxiety: a replication study using a modified version of the probe detection task. Behaviour Research and therapy **37**, 595-604.

金井嘉宏・嶋田洋徳・坂野雄二 2003 対処スタイルが注意バイアスに及ぼす影響。行動療法研究 **29**, 159-170.

杉森絵里子・浅井智久・丹野義彦 2009 健常者用幻聴様体験尺度(AHES)の作成および信頼性・妥当性の検討。心理学研究 **80**, 389-396.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

森本幸子、日本語版 State Social Paranoia Scale の作成と信頼性および妥当性の検討、仙台白百合女子大学紀要、査読有、19号、2015、85 - 90

6 . 研究組織

(1)研究代表者

森本 幸子 (MORIMOTO, Sachiko)

仙台白百合女子大学・心理福祉学科・准教授

研究者番号：10398539